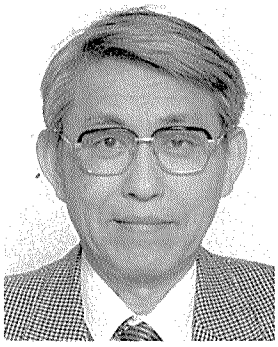

巻頭言

イタリア語を習いながら水稲直播を考える

（公財）日本植物調節剤研究協会東北支部長　田中　良

近年，団塊の世代がようやく仕事や介護から解放されつつあり，海外旅行を楽しむシニア層が増えている。

団体ツアーではしだいに物足りなくなり，自由度の大きい個人旅行の醍醐味に魅せられ，当然ながら現地の人と会話できると楽しさが倍増するので，脳の活性を兼ねてイタリア語会話を習っている。入門クラスから始めたものの進級できずに3年目になるが，上達はあまり気にせず，異文化の雰囲気やグルメの会話に興じている始末である。

イタリア語由来の外来語には，オペラ，ソロなどの音楽関係，マカロニ，エスプレッソなどの料理関係が多く，商品名には，パジェロ，ルーチェなどの車関係，ガンバ，サンフレッチェなどのサッカー関係が親しみを込めて使われている。イタリア語の語尾は母音で終わる日本語と共通しているので他の外国語よりも発音しやすい。イタリア語に親しんでいると栄枯盛衰の歴史や伝統文化に興味が深まり，そして何より美味しいピザやパスタなどのイタリア料理，味わい深いワインや風味豊かなチーズを身近に楽しめるのが最大の魅力である。

一方，イタリアではリゾットなど米を食べる文化があり，北イタリアの河川域では水稲が20万haほど栽培され，輸出もされている。

その栽培の歴史は古く13世紀頃に直播がアジア方面から導入され，20世紀初頭には移植が普及し，機械化も進むが，1970年代以降は労働力問題から無代かき湛水散播に全面的に移行している。田圃の区画は約2ha，単収は5～6ｔ/ha以上，雑草防除は除草剤を播種の前と後に使用し，50ha規模の経営でコストは日本の1/4程度と報告されている（農研機構笹原氏，植調Vol.48,No.4他）。

さて，日本における水稲の直播は「低コスト・省力」を目指して，官民挙げて技術開発に取り組んでいるが，その普及の変遷には盛衰の波や地域よる特異的な偏りがみられている。

直播の普及率（水稲作付面積に対する割合）は，昭和30（1955）年代から高度経済成長を背景とした労働力不足に対応してしだいに増加し，北海道でも湛直が一時期80%を超えるまで普及し，昭和50（1975）年頃には，全国で乾直も含めて過去最高の2%のピークに達する。その後は，高度にシステム化された移植栽培に太刀打ちできず徐々に減少し，平成の初期には0.5%以下に衰退する。しかし，平成10（1998）年頃から落水出芽法が定着し，再び徐々に増加に転じ，平成21（2009）年頃から，鉄コーティング湛水直播が普及し，年々急増し1.5%（2.4万ha）に達する現状にある。また，近年（平成21年）の普及率は，北陸地域の福井県で12%，近隣の富山，石川県では5%，2%，中国地域では岡山県だけが9%，東北地域は各県1%前後であり，このような地域や都道府県による大きな格差は技術的な要因や自然条件だけでは説明がつかず，人為的，社会的な要因の大きさを示している。

これらの直播の変遷や普及状況について，詳しい分析や報告があるが，あえて私見を述べさせてもらえば，移植栽培と競合しながら直播栽培に移行する際の「低コスト・省力」の分岐点が，年代や地域あるいは米価や生産者の年齢，規模によって上下するからと考えられる。

今日の直播のさらなる発展には，時代を先取りするような柔軟な発想が必要になる。例えば，雑草防除には，除草剤による除草効果を十分に発揮できる耕種方法との組み合わせによる新たな栽培技術への進化が期待されていると思う。